

Kansai Nikikai Opera

Sep.2023



第96回オペラ公演『魔笛』(2023年) ©早川壽雄

Contents

- 2.3 『カルメン』作品解説
- 4.5 指揮者・演出家が語る『カルメン』
- 6.7 キャストインタビュー
- 8.9 コンサートレビュー
 - 第96回オペラ公演『魔笛』
 - 第20回サロンオペラ『ジュリオ・チェーザレ』
- 10 谷やんの企画・制作デイリーライフ
- 11 舞台を支える裏方さん / 贊助会員
- 12 新入会員の紹介 / コンサートスケジュール



オペラ
カルメン

Carmen

陽光溢れるスペイン、セビリヤを
舞台に描く灼熱のドラマ

世界で愛される
オペラ史上空前のヒット作品

カルメンという女性にあなたはどんなイメージをお持ちですか？野性的で情熱的なジプシー女。恋から恋へと渡り歩き、男を破滅させずにはおかないファム・ファタール（運命の女）。関西二期会の第97回公演はジョルジュ・ビゼーによるオペラ史上空前のヒット作品『カルメン』を上演します。リブレットをアンリ・メイヤックとリュドヴィク・アレヴィが手掛け、プロスペル・メリメの同名小説をアレンジ。陽光溢れるスペイン、セビリヤを舞台に、カルメンとドン・ホセの灼熱のドラマが展開されます。

1875年3月、パリ、オペラ・コミック座で初演されたこの作品は、当初、多くの聴衆を戸惑わせたと伝えられています。理由はこの劇場を中心に、当時流行していた“オペラ・コミック”というジャンルが音楽と歌をセリフでつなぐ軽めの内容であったのに対し、作品は最後が殺人で終わる悲劇だったこと。さらに登場人物を当時の社会の最下層に生きる犯罪者集団の中に描いたことなどによるものでした。しかし『カルメン』は次第に注目を集め、ビゼーのもとへはウィーンでの公演とそのためのレチタティーヴォ版への改作の要請が届けられます。ところがこの成功を目前に彼は心臓発作により36歳で急逝。友人の作曲家エルネスト・ギローが改作を施してウィーン上演を果たし、これが契機となって世界各国で人気を博してゆくのです。日本人による初演は1922年、浅草オペラ全盛の東京金龍館において。以来100年、多くの人々に親しまれてきたこの作品の、今まで大きなリスペクトを込めての上演です。

セビリヤ地方。昼休みに広場に現れた、タバコ工場の女工たちに男たちが言い寄っています。彼らの一番の目当てはカルメン。彼女は「恋は野の鳥、飼い慣らす



1875年、フランスの風刺雑誌「JOURNAL AMUSANT」に掲載されたイラスト

ことなどできない」と歌って男たちをあしらい、自分に興味を示さない竜騎兵伍長のドン・ホセに花を投げてその心を揺さぶります。そんなホセのもとを訪れたのが婚約者のミカエラ。彼女は故郷にいるホセの母親からの手紙を届けて帰ります。一方タバコ工場ではカルメンが喧嘩騒ぎを起こし、牢に送られることに。彼女は護送の任務についてホセを、逃がしてくれたらリリヤス・バステイアの酒場で会おう、と誘惑します。ホセはこの誘惑に負け、彼女の縄を解くのでした。

その1か月後、リリヤス・バステイアの酒場ではホセの上官ズニガがカルメンの気を惹こうとしています。彼は



カルメンを逃がした罪で捕らえられていたホセが、今日釈放されると話します。闘牛士エスカミーリョが言い寄り、密輸団の首領ダンカイロが次の仕事に誘う中、ホセを待ち続けるカルメン。やがて現れたホセはカルメンへの変わらぬ想いを歌いますが、帰郷の時間を気にするホセを彼女が引き留めているところヘズニガが戻って来てしまいます。カルメンを巡って争う2人。剣を抜いたホセは行き場を失い、そのまま密輸団の群れへと身を投じるのでした…。

もう1人の運命の女、セレスト・モガドール

思うままに生き、愛し、最後は自らの気持ちに殉じるカルメンの姿は、強烈なまでの生命の燃焼を感じさせずにはおきません。実はメリメの原作のカルメンにはこれほどの存在感はなく、彼女の魅力はオペラによって永遠のものとなったのです。

このキャラクターに強い影響を与えた女性がいた、と言えば驚かれる方も多いでしょう。セレスト・ヴェナール、またの名をセレスト・モガドールと呼ばれたパリの元高級娼婦です。ある時はダンスホールの踊り子、ある時はサーカスの曲芸師、さらに作家であり、劇場支配人であり、女優・歌手でもありました。その経歴からは女性としての魅力に加え、一筋縄ではいかない生命力に溢れた人物が思い浮かびます。

彼女の交遊は当時、文壇の大御所であったデュマをはじめ多くの作家、画家、音楽家に及んでいます。ビゼーとの出会いは1865年。当時セレストは41歳、ビゼーは27歳。彼女は結婚してすでに夫を亡くし、リオネル・ド・シャブリヤン伯爵夫人となっていました。2人の関係は4年後のビゼーの結婚まで続きます。

このセレストが歌い聽かせたという歌をビゼーはほぼそのまま、『カルメン』に用いています。それがハバネラ『恋は野の鳥』。原曲はスペイン出身の作曲家セバスチャン・イラディエルの作品ですが、ビゼーはこれを南米の民謡と信じていたようです。この曲を歌うカルメンにセレストの面影を重ねていた可能性もあるでしょう。

ビゼーの短い人生を見渡した時、女性関係と言えそうなものは多くはなく、このセレストとの関係がやはり異彩を放っています。ヒロインの造形のみならず、このオペラが書かれた動機そのものがセレストにあったのでは、そんな想像さえ膨らんでくるほどです。オペラ史上屈指のファム・ファタールを生み、ビゼーの名を不朽の



セレスト・モガドールの肖像画

ものとした『カルメン』の背景にもう1人の運命の女性の存在があったことは、まさにこの作品にふさわしい魅力的なエピソードと言えるでしょう。

色彩感溢れる音楽を指揮するのは各国のオーケストラと共に演を重ねるグイード・マリア・グイーダ。管弦楽に大阪交響楽団、そして演出には新国立劇場オペラ劇場演出チーフほかを務め、数々の話題作を手掛ける三浦安浩を迎えます。関西二期会が総力を結集して放つ歌劇『カルメン』にご期待ください。

(逢坂聖也)

公演情報

第97回オペラ公演『カルメン』

<全4幕 フランス語上演・字幕付>

指揮：グイード・マリア・グイーダ

演出：三浦 安浩

管弦楽：大阪交響楽団

公演日程：2023年11月25日（土）16:00 開演

11月26日（日）14:00 開演

公演会場：メイシアター 吹田市文化会館大ホール

11月25日	役名	11月26日
糸谷 栄里子	カルメン	十合 翔子 ※客演
小餅谷 哲男	ドン・ホセ	水口 健次
中西 千尋	ミカエラ	奥田 敏子
西尾 岳史	エスカミーリョ	谷本 尚隆
山咲 韶	モラレス	東 平聞
片桐 直樹	スニガ	武久 竜也
野々村 瞳	フラスキータ	田村 香絵子
岸畑 真由子	メルセデス	名島 嘉津栄
中野 嘉章	ダンカイロ	服部 英生
しまふく 羊太	レメンダード	山本 欽也

指揮者・演出家が語る『カルメン』

イタリアの指揮者グイード・マリア・グイーダ氏と気鋭の演出家三浦安浩氏が、オペラ史上最も人気の高い傑作『カルメン』を手掛ける。二人に作品の魅力と取り組みを聞いた。

『カルメン』をどのように演奏されたいですか。

初演は1875年。ジョルジュ・ビゼーはパリのオペラ・コミック座で初演するため、セリフで進行する「オペラ・コミック」の様式にのっとり、仏語のセリフ付き歌劇『カルメン』を作曲しました。しかしこれは仏語を母国語としない歌手にとっては、演じることが難しいものでした。初演後にビゼーは急死しますが、友人のエルネスト・ギローが、セリフの部分をレチタティーヴォに改定します。それによりこのオペラは、爆発的な人気を誇るフランス・オペラとなりました。ビゼーのフレーズの反復方法はとても知的で、登場人物の心理を巧みに表現します。本公演では一部カットもありますが、ビゼーの残した音楽を、レチタティーヴォも交えて滑らかに紡ぎ、上演したいと思います。

『カルメン』の音楽はあまりにも有名です。指揮者としてどのような点に魅力を感じますか。

愛、殺人、自由といった要素が複雑に入り混じりバランスを取っています。勇ましく躍動的かと思えば、甘美で官能的。音楽のコントラストの振り幅が大きく、それが物語を壮大でドラマティックにしています。余談ですが、思想家ニーチェは、私の出生地でもあるイタリア・トリノでこのオペラを鑑賞し、夢中になったそうです。それはオペラに含まれる様々な要素に加え、フランス人のビゼーがスペイン情緒たっぷりの音楽を作曲したという点にも興味を惹かれたのでしょう。

登場人物についてはいかがでしょうか。

純情で母性的な婚約者ミカエラがありながら、官能的で肉體的な魅力に溢れるカルメンに惹かれるドン・ホセ。一度に二人の女性を愛することは不貞とされますが、とはいえる無いものを補うように愛し合う事は現実社会でもあるかもしれません。

初演当時の女性達にとって、奔放で自由を愛するカルメンの存在はスキャンダラスだったでしょう。とはいえ、「自由を勝ち取る」という考え方はとても現代的。そのためカルメンはモダンな思想を持つ女性であったと言えます。



指揮者 グイード・マリア・グイーダ

関西二期会とは3度目の共演になります。

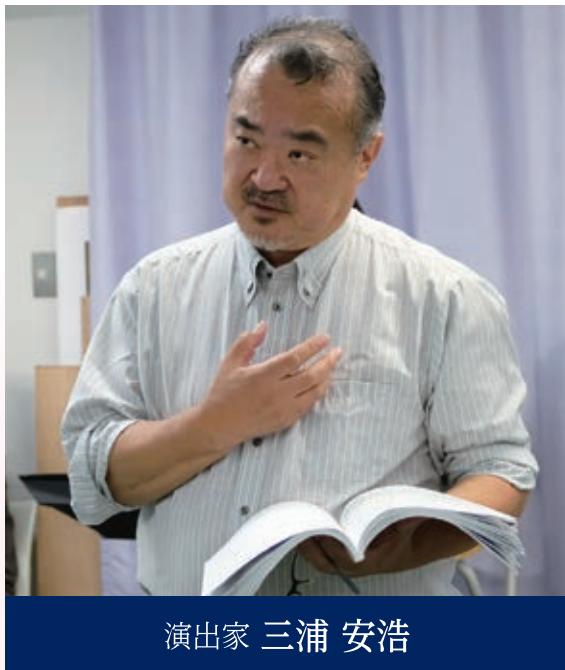
2019年に『フィガロの結婚』、20年に『カヴァレリア・ルスティカーナ』『道化師』と続けて指揮を務めました。21年は『オテッロ』の準備を進めていましたが、残念ながらコロナ禍のため中止となつた。関西二期会の歌手の皆さんには素晴らしい、マネジメントも含め、質の高い仕事をされます。大阪交響楽団、児童合唱との共演もあり、どのように作品が仕上がるか、とても楽しみです。

(取材・文 四柳育子)



稽古場で指導するグイーダ氏(右から2人目)

グイード・マリア・グイーダ
イタリアのトリノ出身。世界的な指揮者ジュゼッペ・シノーポリのアシスタントを12年間務め、三大テノールのホセ・カラース、プラシド・ドミンゴなどと現場を共にしてきた。世界中のオーケストラやオペラプロダクションに参加し、聴衆や批評家から賞賛を受けている。1995年にはRAI国立管弦楽団を率いた日本でのツアーで成功をおさめた。関西二期会とは3度目の共演となる。



演出家 三浦 安浩

作曲家のビゼーが、『カルメン』を通じて伝えたかったことはどんなことでしょうか。

才能豊かなビゼーは、両親から出世してもらいたいという思いを受けて育ってきたのですが、彼は挫折をしある意味ドン・ホセという人物はビゼー自身だと思っています。竜騎兵の伍長が狂って転落していくドラマは、当時の人々にとっては不謹慎な題材でしたが、ビゼーは強い意志を持って、「自分はこうやって生きてきた。この作品を作りたい」という思いをぶつけたのではないかと思います。

ホセのイメージ像を教えてください。

ホセは、ある時暴力事件を起こし、その土地から逃げるようにして南スペインのセヴィリアで竜騎兵の伍長をしています。孤独な兵隊生活の中で「苦労をかけたお母さんを楽にしてあげたい」と、ある程度屈辱的なことにも耐えていて、今回はその肩に乗っかっているプレッシャーというものを強調して描きたいと思っています。

真面目なホセが抱えている葛藤が、カルメンとの熱烈な恋に繋がっていくのですね。

ジプシーということで虐げられているカルメンの中に、

自分と同じようなものを見たのではないでしょか。セヴィリアで自分は異邦人だという思いがあり、その辺りでもカルメンに近いものを感じたのでしょうか。カルメンも、彼の中に純粋に大事にしようとする何かを見出したから惹かれたに違いないと捉えています。そういう意味で純愛だと僕は思う。

今回の演出でとくにこだわりたいことは、どんな所ですか。

このオペラの中では、スペインのピラミッド社会が描かれていて、貴族のホセと底辺にあるジプシーのカルメンとの価値観の違いが、二人の純粋な愛を傷つけ壊していくんですね。その部分を舞台装置で表したい。男性と女性を象徴している大きなパネルに穴が開いて、だんだんとお互いの傷がたくさん生まれてくるのが見えてくる様子を描いていきたいです。

最後には、ホセがカルメンを殺すという悲劇が起こります。

この『カルメン』の悲劇とは、人間が本当の自由や愛を求めるとき、それは社会から抹殺される危険があるということです。逆に言うと、我々は生きていくためには、どこかで妥協しなくてはいけないのだよということ。たいがいの人は、純粋なものを少しずつ失いながら生きているのではないでしょうか。

出演者に期待したいことは、どんなことでしょうか。

最終的に大事なことは、演じる人がその役に共感するということだと思います。役になりきり、その人が夜の闇を感じたり光の強さを感じたり、しっかりとそこに生きているということが舞台の魅力なのかなと思う。その魅力を一人一人が感じながら演じてもらうと大変嬉しいです。

(取材・文 金子真由)

三浦 安浩

メリーランド大学大学院修了。テノール歌手として活躍後、2006年新国立劇場小劇場「セルセ」で本格的デビュー。主な演出作品に、日生劇場「フィデリオ」、新日本フィル「火刑台上のジャンヌ・ダルク」(三菱信託奨励賞受賞)、文化庁「てかがみ」、石川県・金沢市共催「禅～ZEN」など。海外公演にも多数参加。現在、桐朋学園大学大学院特別招聘講師、静岡国際オペラコンクール審査委員。YouTube「アンコウの燃えよオペラ！」好評配信中。